



私の
フィールド
ワーク

混成の小宇宙2000-2019

小田淳一 おだじゅんいち/AA研フェロー

インド洋西域の島嶼世界で語られている民話を集めて20余年になる。
最も頻繁に訪れたレユニオン島での
様々な「混ぜこぜ」状態のダイナミズムには
未だに圧倒される。



レユニオン島との20年

フランス共和国の海外県レユニオン島を訪れることになったきっかけは半ば偶然のようなものだった。1998年の1月、冬のバリーで安ホテルに滞在していた時、たちの悪いインフルエンザにかかり、ほとんど水だけを飲んで寝込んでいた。2日ほど経った頃そろそろ何か食べないとまずいと思い、ふらつく足でホテルを出たがその日はあいにく日曜日で、当時のパリでは休日に営業しているカフェは今よりもずっと少なかった。大通りまでさまよい出て開いているカフェに適当に入り、朦朧とした頭でメニューを眺めていると「レユニオン」という語が目に入った。「レユニオン」とは会議とか集会、または合併とか併合などを表す、ごく普通の名詞である。なぜかその言葉が妙に気になって(これは具合が悪い時の典型的な症状である)、取り敢えずその名前がついている飲み物を注文した(これも具合が悪い時の不可思議な行動である)。その代物は、あとになって知ったのであるが、レユニオン島で作られている「シャレット(牛がひく荷車)」という銘柄のラム酒だった。サトウキビの搾りかすに水を加えて発酵

させ、さらにそれを蒸留した癖のある49度の透明な酒である。何だかよくわからないままそれを空きっ腹に3杯放り込んだので、朦朧とした頭にさらに霞がかかったような状態になったが、陶然としているうちにインフルエンザが治ったように感じた。その時思ったのは、その妙な名前の島までお礼参りに行かなければならないということだった。

それから2年少し経った2000年3月に文部省(当時)の短期在外研究員としてレユニオン島に降り立つことができた。その申請書に適当に書いた目的が民話の調査だったので、それ以来インド洋の民話を扱うことになったのであるが、短い滞在での様々な体験をこの『フィールドプラス』の前身に相当するAA研『通信』99号(2000年7月)に書いた(「混成の小宇宙—レユニオン島—」)。その初めての訪問以降毎年1回は島を訪れていたが、2020年はCOVID-19の世界的流行でそれが叶わなかった。今回、20年間の言わば総括を書くことになったのも何かの巡り合わせかも知れない。

圏谷に点在する家。

1905年にフランスで最初に建立されたモスクの内部。

糖蜜を原料とするトラディショナルラムの「シャレット」。



最初期の中国系移民宅にある道教の祭壇。



サトウキビ畑に隣接するヒन्दゥー教寺院。



洋上の実験室

長らくレユニオン大学で教えていた社会学者のユ=シオン・リヴさんは、マダガスカル生まれであるが生粋の中国人で、ハビトゥス理論で有名なフランスの社会学者ブルデューの最後の弟子のひとりであり、2002年夏から1年間AA研に外国人研究員として滞在した。レユニオン大学で初めてお会いした時、彼は開口一番「レユニオン島は壮大な《実験室》なんだよ」と説明してくれた。つまり、約400年前に当時の首席国務卿であったリシュリュウ枢機卿の思いつきから、インド洋の小さな無人島に周辺から様々な出自の人々が集められ、そのまま現在まで「混ぜこぜ」の実験が行われているという意味である。

レユニオンの住民たちの地域的な出自は一般に、カフル(東アフリカ系でマダガスカル系を含む場合がある)、マラバル(インド・タミル系)、ザラブ(インド・グジャラートのムスリム)、シノワ(主に客家・広東の中国系)、グロ・ブラン(沿岸部の白人富裕層)、ヤブ(高地の白人貧困層)に分類され、白人を除いてはいずれもフランス植民地時代の奴隷あるいは契約労働者の子孫である。聞き取り調査で高齢者を訪ね歩いた時に一族の集合写真をよく見せられたが、血族だけの写真でも人々の肌の色は白、黒、黄、褐色にそれらのグラデーションというような具合で、4世紀にわたる人種的混濁の過程を物語っている。そしてこの混濁状態は音楽や料理などの文化全体についても言えるのである。

人の呼び方

ところで、日常生活の様々な場面で名前以外に個人を特定するには何らかの呼称が必要となる。対フランス本土という

コンテキストでは「レユニオン人」、そしてその下位範疇としては「混血 métis」あるいは「クレオール」という語が用いられる。人を指す際の「クレオール」という語は多義的であるが、レユニオン島では、島で生まれ、かつレユニオン・クレオール語を母語とする人々のことを指す。しかし混血の度合いが複雑なクレオールをどう呼ぶかとなると、レユニオンの特殊事情が絡んでくる。例えば調査時に家系のことを尋ねた際に、母方祖父



語り手養成セミナーの修了式。Credits photo: Udir. (レユニオン・アイデンティティ擁護協会より転載許可)。



レユニオンでよく食べた中国風チキン。赤いのは激辛の漬物。

ココナツのラム・アランジェ。

がインド移民、父方祖母がアフロ・マダガスカル系クレオール、父方祖父が中国移民という男性、さらには母方祖父がアフロ・マダガスカル系クレオール、母方祖母がフランス人、父方祖母がアフロ・マダガスカル系クレオール、父方祖父がブラジル人という女性がいた。このような場合に彼／彼女をどのように呼ぶかという、結局は表現型において顕性を示す肌の色や顔つき、つまり「見た目」で呼ぶしかなく、その際に用いられる呼称が上で述べた「出自」の分類である。しかもそこには、特殊なコンテキストを除いては出自や肌の色についての禁忌はまったく存在していない。それはレユニオンのように混血化が進んだ究極の多民族社会では人の範疇化が最も識別容易な外見に基づくという逆説的な理由によるものであろう。

民話とその語り手

民話を採話する際、語り手の形態はさまざまである。語り手の自宅を訪問して幾つかの物語を語ってもらうこともあれば、そこに他の語り手が集まってちょっとした民話の会になることもある。そして、語り手と聴き手の数がどれほど少なからうと大抵の場合は饗宴を伴う。それは語りの前であったり、後であったり、時にはその双方だったりする。とりわけ語り手の数が多い時には深夜まで順番に持ちネタを披露し続け、アルコールが入った大勢の民話の会ではしばしば歌を伴う政治的メッセージが声高に交わされる。それはまさしく、イエズス会司祭にして文化史家のオングが『声の文化と文字

の文化』の中で指摘しているように、口承性が反権威、反体制に向かう傾向を持つことを実感させられる情景だった。

語り手はプロのこともあるし、アマチュアのこともあるがプロとアマチュアとの境は曖昧で、ごく少数の例外を除いて民話の語り手は何かしらの本業を持っている。それは学校の先生だったり、自然が豊かなレユニオンのツアーガイドだったり、家禽や非法植物を扱う農業従事者などである。さらにレユニオンでは語り手養成のセミナーがよく開催され、セミナーの修了証をもらったお墨付きの語り手たちが大量生産されている。セミナーの卒業公演を聴いたことがあるが、その中に往時の中国系移民の悪辣な商売を嘲笑するような話から始めた受講生がいたので、これはまずいのではないかと周りを見渡したがシノフ(中国系)の受講生がいなかったのでほっとしたことがある。

語り手の諸事情

何人かの語り手と知り合うと、語り手の世界の色々な事情がわかってくる。現在、語り手の団体は幾つかあるが、最も大きな協会の現会長は本土出身の白人男性で、彼のパートナーは現地の語り手の女性(インド・アフリカ系クレオール)である。驚いたのは、前会長も本土からやって来た白人女性で、現地の語り手の男性(こちらもインド・アフリカ系クレオール)が彼女のパートナーである。この対称パターンに何か理由があるのかどうかはわからない。語り手の中には、本土から来た会長が自分たちから登録料を徴収して団体を運営し、教育機関やメディアに売り込んだり、出版事業に進出するような活動を快く思わない人々もいる。民話が島の文化遺産であり、また観光資源であることに目をつけた篡奪者が本土から乗り込んで来たという被害者意識なのであろうか。

結局はラム酒

民話を採話している時によく「どう理由で遠い日本からわざわざ地球の隅っこにある小さな島の物語なんかを集めるに來るんだい？」と聞かれることがある。いつも用意している答えはこんな感じである：「うちの国は文化国家なので世界の果ての異文化を調査するのに国が金を出してくれるんだよ。隣の大きな国がコモロに病院や空港を造るほどの金はないけどね」。ただ、それぞれの語り手が自慢にしている自家製のラム・アランジェ(ラム酒に色々なものを漬けた甘くて強い混成酒)を何杯も飲まれた時について「お礼参り」の件を白状すると、台所から「シャレット」が出て来て一緒にレユニオン島に乾杯を重ねる羽目になるのである。 FP